

平成 21 年 7 月 14 日判決言渡 同日原本領収 裁判所書記官

平成 20 年（行ケ）第 10360 号 審決取消請求事件

口頭弁論終結日 平成 21 年 5 月 26 日

## 判 決

原	告	X		
同訴訟代理人弁護士		大		毅
被	告	特許庁長官		
同 指 定 代 理 人		川	本	眞
		蓮	井	雅
		紀	本	孝
		安	達	輝
				幸

## 主 文

原告の請求を棄却する。

訴訟費用は原告の負担とする。

## 事実及び理由

### 第 1 請求

特許庁が不服 2005 - 20125 号事件について平成 20 年 8 月 25 日にした審決を取り消す。

### 第 2 事案の概要

本件は、原告が、下記 1 のとおりの手続において、本件補正後の発明の要旨を下記 2 とする原告の本件出願に対する拒絶査定不服審判の請求について特許庁が同請求は成り立たないとした別紙審決書（写し）の本件審決（その理由の要旨は下記 3 のとおり）には、下記 4 の取消事由があると主張して、その取消しを求める事案である。

#### 1 特許庁における手続の経緯

##### (1) 本件出願（甲 5）及び拒絶査定

発明の名称：「ハンガー」

出願番号：特願 2 0 0 3 - 7 3 1 8 1 号

出願日：平成 1 5 年 3 月 1 8 日

拒絶査定：平成 1 7 年 9 月 1 5 日付け

## (2) 審判手続及び本件審決

審判請求日：平成 1 7 年 1 0 月 1 9 日（不服 2 0 0 5 - 2 0 1 2 5 号）

手続補正：平成 2 0 年 6 月 1 6 日（甲 6。以下「本件補正」という。）

本件審決日：平成 2 0 年 8 月 2 5 日

本件審決の結論：「本件審判の請求は，成り立たない。」

審決謄本送達日：平成 2 0 年 9 月 5 日

## 2 発明の要旨

本件審決が対象とした本件補正後の請求項 1 に記載の発明（以下「本願発明」という。）は，以下のとおりである。なお，本件補正後の請求項 1 の原文では，「相通穴」と記載されているが，同記載が「挿通穴」の誤記であることは，当事者間に争いがない。

【請求項 1】ハンガー本体と該ハンガー本体の腕部内に収まる大きさの補助ハンガーとよりなり，ハンガー本体の中心部には，補助ハンガーに固定された吊り杆が一定距離上下動し且回転自在に挿通する挿通穴を設けると共に挿通穴の下端部にハンガー本体の腕部とは十字方向の下向きの掛合凹部を設け，ハンガー本体と補助ハンガーの互いの腕部を回動させてハンガー本体の腕部内に補助ハンガーを収めて一本状態に止着自在とすると共に，凹部に補助ハンガーを係合させて十字型状態に止着自在とし，吊り杆のより以上の落下を防止するストッパーと挿通穴の間にバネを設けて，バネに抗して吊り杆を押し引き下げ自在としたハンガー。

## 3 本件審決の理由の要旨

本件審決の理由は，要するに，本願発明は，下記(1)の引用例 1 に記載された発明（以下「引用発明 1」という。） ， 下記(2)の引用例 2 に記載された発明（以下

「引用発明 2」という。)並びに下記(3)及び(4)の周知例 1 及び 2 に記載された周知技術に基づいて、当業者が容易に発明をすることができたものであるから、特許法 29 条 2 項の規定により特許を受けることができない、というものである。

(1) 引用例 1 実公昭 37 - 17367 号公報 (甲 1)

(2) 引用例 2 実願昭 62 - 8215 号 (実開昭 63 - 117359 号) のマイクロフィルム (甲 2)

(3) 周知例 1 実願昭 12 - 19267 号 (実公昭 12 - 14998 号) のマイクロフィルム (甲 3)

(4) 周知例 2 実願昭 52 - 175606 号 (実開昭 54 - 98736 号) のマイクロフィルム (甲 4)

なお、本件審決がその判断の前提として認定した本願発明と引用発明 1 との相違点は、以下のとおりである。

本願発明は、吊り杆を「補助ハンガーに固定」し、ハンガー本体の中心部に「ハンガー本体の腕部とは十字方向の下向きに掛合凹部を設け」、「凹部に補助ハンガーを係合させて」十字型状態に止着自在とし、「ストッパーと挿通穴の間にバネを設けて、バネに抗して吊り杆を押し引き下げ自在とした」のに対して、引用発明 1 は、そのように構成されていない点

#### 4 取消事由

(1) 相違点についての判断の誤り (取消事由 1)

(2) 顕著な作用効果についての判断の誤り (取消事由 2)

### 第 3 当事者の主張

#### 1 取消事由 1 について

〔原告の主張〕

(1) 引用発明 2 を引用発明 1 に適用し得るか

ア 本件審決 (6 頁 2 ~ 7 行) は、引用発明 1 に引用発明 2 を適用して、吊り杆を「補助ハンガーに固定」し、ハンガー本体の中心部に設けられた下向きの凹部を

「掛合凹部」とし、「凹部に補助ハンガーを係合させて」止着自在とし、「ストッパーと挿通穴の間にバネを設けて、バネに抗して吊り杆を押し引き下げ自在」とすること、すなわち、本願発明の構成とすることは、当業者であれば容易に想到し得ることであると判断したが、以下のとおり、第 1 に、引用発明 2 の構成を引用発明 1 に適用し得ない点において、第 2 に、その適用を認め得るとしても、本願発明の構成に容易に想到し得ない点において、その判断は誤っている。

イ 引用発明 1 は、「通風の良好によつて形を損ぜずに速かに乾燥」（引用例 1 の 1 頁左欄末行～右欄 1 行）させることを用途とするものであるのに対し、引用発明 2 は、洗濯物の量や日差しに応じ物干し竿に対して適当な角度で旋回止めして用いることができるようにすること、衣装ダンス内でハンガー主体の正面を使用者の方向に向けることができるようにすること（引用例 2 の明細書 5 頁 1～5 行）などを用途とするものであるから、当業者は、引用発明 1 に引用発明 2 を適用することに容易に想到することができないというべきである。

ウ また、本願発明は、ハンガー本体と補助ハンガーとを十字型状態にし、かぶせた洗濯物を最大限に広げることにより、衣類内部への空気の流通を自在とし、乾燥効果を高めることを目的とするものであり、引用発明 2 の上記用途を全く予定していないのに対し、引用発明 2 は、上記用途に用いることを目的とするものであり、両者は、解決課題及び技術的思想を異にするものであるから、仮に、引用発明 1 に引用発明 2 を適用し得るとしても、これによって、本願発明の構成に容易に想到し得るということとはできない。

## (2) 掛合凹部の構成が設計的事項といえるか

ア 本件審決（6 頁 7～15 行）は、本願発明の構成のうち、ハンガー本体の中心部に「ハンガー本体の腕部とは十字方向の下向きの掛合凹部を設け（る）」との構成（以下「掛合凹部の構成」という。）につき、ハンガー本体の中心部における挿通穴の下端部に下向きの掛合凹部を設けることが従来周知である（例えば、周知例 1（凹処 6 参照）、周知例 2（切込み溝 5 a 参照）などを参照）ことからみて、

引用発明１の「下向きの凹部」も「掛合凹部」であると推察されること、さらに、引用発明１において、ハンガー本体と補助ハンガーとが一本状態と十字型状態をとること、などを勘案すれば、引用発明１の「下向きの凹部」を本願発明の掛合凹部の構成とすることは、当業者が適宜なし得ることであり、設計的事項にすぎないと判断したが、以下のとおり、その判断は誤っている。

イ 引用例１をみる限り、引用発明１の下向きの凹部が掛合凹部であるものと確認することはできないから、引用発明１の「下向きの凹部」も「掛合凹部」であると推察されたとの本件審決の認定は、その根拠を欠くものである。

ウ また、本件審決が認定した周知技術や引用発明１を基にして掛合凹部を設ける場合には、ハンガーの一部を削って凹部とするなどし、掛合凹部としての新たな凹部を設けないことから、揺動ガタを防止するため、引用例１の第４図に示されたような別加工の大掛かりな支片を設ける必要があるのに対し、本願発明においては、ハンガーとは別に凹みの大きい掛合凹部を設けることにより、上記のような支片を設けることなく、揺動ガタを防止することができる。

要するに、本願発明の掛合凹部は、本件審決が認定した周知技術や引用発明１を基に形成され得る掛合凹部とは、その仕組みを異にするものであって、設計的事項にすぎないものではないから、当該周知技術や引用発明１から、本願発明の掛合凹部の構成に容易に想到することはできないというべきである。なお、周知例１に記載された技術はバネがないことにより、周知例２に記載された技術は重合状にある場合に押さえがないことにより、いずれも、本願発明に比して不安定なものである。

〔被告の主張〕

(1) 引用発明２を引用発明１に適用し得るか

ア 技術分野について

引用発明１及び２は、いずれもハンガーに関する発明であり、その属する技術分野を共通にしている。

イ 構成及び機能について

引用発明 1 は、ハンガー本体（ハンガー主杆 1）が補助部材（ハンガー主杆 2）に対して吊り杆（掛吊杆 4）を中心に相対的に回動し得るように構成されており、これにより、補助部材に対するハンガー本体の向きを変えることができるという機能を有している。

また、引用発明 2 は、ハンガー本体（ハンガー主体 2）が補助部材（かけはずし継手 3<sub>1</sub>）に対して吊り杆（フック 1）を中心に相対的に回動し得るように構成されており、これにより、補助部材に対するハンガー本体の向きを変えることができるという機能を有している。

このように、引用発明 1 及び 2 は、ハンガー本体が補助部材に対して吊り杆を中心に相対的に回動し得るように構成されており、これにより、補助部材に対するハンガー本体の向きを変えることができるという点で、その構成及び機能を共通にするものである。

#### ウ 小括

以上からすると、当業者であれば、引用発明 1 に引用発明 2 を適用して、本願発明の構成に容易に想到することができるというべきである。

#### (2) 掛合凹部の構成が設計的事項といえるか

引用発明 2 のハンガー本体（ハンガー主体 2）に形成された「下向きの掛合凹部」（かけはずし継手 3<sub>2</sub>）は、多数の歯体から成るものであるところ、同発明の補助部材（かけはずし継手 3<sub>1</sub>）にも多数の歯体が形成されているため、これらの歯体同士の掛合により、同発明は、揺動ガタを生じることなく、そのハンガー本体を補助部材に対し「適当角度に旋回止め」することができるものである。そして、同発明において、ハンガー本体を物干竿等に直交する向きに掛ける場合と平行な向きに掛ける場合の 2 通りの状態をとることで十分であるとするときは、その構造からみて、同発明の「下向きの掛合凹部」（かけはずし継手 3<sub>2</sub>の歯体）を「ハンガー本体の腕部とは十字方向の下向きの掛合凹部」、すなわち、本願発明の掛合凹部の構成にすればよいことが明らかである。

また、引用発明 1 と同種のハンガーにおいて、ハンガー本体の中心部における挿通穴の下端部に下向きの掛合凹部を設けること、すなわち、凹部を掛合凹部にすることは、例えば、周知例 1 及び 2 等にみられるように従来周知の技術であるから、引用発明 1 の「下向きの凹部」も「掛合凹部」とであると推測することができる。

以上に加え、引用発明 1 のハンガー本体と補助部材が一本状態と十字型状態をとることをも併せ考慮すると、引用発明 1 に引用発明 2 を適用する際、引用発明 1 の「下向きの凹部」を掛合凹部に係る本願発明の構成とすることは、本件審決の判断するとおり、当業者が適宜なし得る設計的事項にすぎないというべきである。

## 2 取消事由 2 について

### 〔原告の主張〕

本件審決（6 頁 20 ～ 22 行）は、本願発明の効果につき、引用例 1 の記載や引用例 2 の記載などから当業者が予測できる範囲内のものであって、格別なものとはいえないと判断したが、本願発明は、次のとおりの顕著な作用効果を奏するものであるから、本件審決の判断には、これを看過した誤りがある。

### (1) 速乾性

本願発明は、ハンガー本体に洗濯物を掛けた後にハンガー本体と補助ハンガーとを十字状に止着し、ハンガー本体と補助ハンガーとそのいずれの腕部にも洗濯物をつるすことを構造上想定しているものであるところ、このように、本願発明においては、洗濯物が十字状のハンガーにつるされて乾燥されるため、洗濯物を最大限に広げ、内部の通気性を良くすることが可能であり、通常のハンガー（引用発明 1 及び 2 においても同じであると考えられる。）に比して、優れた速乾性（通常の 3 分の 2 程度の時間で足りる。）を発揮するものである。

### (2) 効率性及び安全性

引用発明 1 も、十字状で使用することが考えられないわけではないが、その場合、十字状とする際及び洗濯物の取り込みのため一本状に戻す際の 2 度にわたり、洗濯物の下から手を差し入れて、主杆 2 を弾機 3 に抗して手で引き下げるという非常に

煩わしい作業（両手を用いても至難の業である。）を要する。

これに対し、本願発明は、補助腕部 3 に掛け杆 5 が一体化され、挿通穴 6 の下端部に下向きの十字方向の凹部 7 が設けられているため、掛け杆 5 の頭部の吊部分をバネ 10 に抗して押し下げ回転させることにより、簡単に十字状及び一本状に止着することができるので、引用発明 1 に比して、非常に効率的である。

また、引用発明 1 においては、別加工の支片（引用例 1 の第 2 図及び第 4 図参照）の突出部により、女性や子供が手等にけがをする危険がある。

これに対し、本願発明においては、上記突出部が存在しないので、そのような危険が一切ない。

〔被告の主張〕

（1）速乾性

速乾性を発揮させる目的で、ハンガー本体と補助ハンガーとで洗濯物を広げて乾燥させることは、例えば、実願昭 59 - 45519 号（実開昭 60 - 158597 号）のマイクロフィルム（乙 1。以下「乙 1 公報」という。）の記載及び図示（明細書 4 頁 10 行～ 5 頁の表及び同頁下から 2 行～ 6 頁 2 行並びに第 3 図）等にみられるように、従来周知の乾燥方法である。

また、引用発明 1 の吊挟み金具は、様々な掛吊支持を可能とするものである（引用例 1 の 1 頁左欄 15～ 22 行、同頁右欄 12～ 19 行等参照）から、同発明において、本願発明のように洗濯物を十字状に広げて干すとの用途を有することが否定されるものではないし、引用発明 1 においては、その構造からみても、本願発明のように洗濯物を十字状に広げて干すことが可能である（引用例 1 の 1 頁左欄 15～ 18 行参照）。

このように、原告が主張する本願発明の乾燥方式は、従来周知の乾燥方式にすぎず、引用発明 1 においても同様の乾燥方式をとり得るのであるから、乾燥方式に関する本願発明の技術的思想は、格別のものといえないし、また、引用発明 1 も、速乾性に関する本願発明の作用効果を奏するものである。したがって、同作用効果は、



当業者が予測することのできる程度のものであるといわざるを得ない。

(2) 効率性及び安全性

ア 引用発明 2 は、吊り杆（フック 1）をバネ（弾性体 4）に抗して押し下げ、ハンガー本体（ハンガー主体 2）を相対的に回転させて、その向きを物干竿と直交する方向にも平行な方向にも簡単に変えて止着することができ、その際、洗濯物の下から手を差し入れて補助部材（かけはずし継手 3<sub>1</sub>）を手でバネに抗して引き下げる必要がなく、同発明は、効率性に関し、本願発明と同様の作用効果を奏するものである。

イ また、「下向きの掛合凹部」を設けた引用発明 2 を引用発明 1 に適用すれば、揺動ガタを防止するための掛止杆 10 や支片 7 等がもはや不要となることは明らかである。

ウ 以上からすると、原告が主張する効率性及び安全性に関する本願発明の作用効果は、引用発明 1 及び 2 から当業者が予測し得る程度のものであって、格別のものということとはできない。

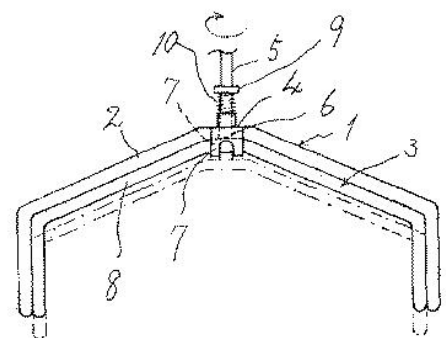
第 4 当裁判所の判断

1 取消事由 1（相違点についての判断の誤り）について

(1) 引用発明 2 を引用発明 1 に適用し得るか否か

ア 本願発明について

本願発明の構成は、前記第 2 の 2 のとおりであるが、願書に添付された図面（甲 5）は、右のとおりである。



イ 引用発明 1 について

(ア) 引用発明 1 の構成

引用発明 1 の構成が次のとおりであることは、当事者間に争いがない。

「ハンガー主杆 1 と該ハンガー主杆 1 の下面に重合されるハンガー主杆 2 とよりなり、ハンガー主杆 1 の中心部には、掛吊杆 4 が一定距離上下動し且回転自在に挿

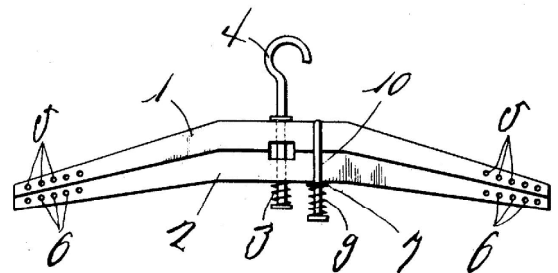
通する挿通孔を設けると共に挿通孔の下端部に下向きの凹部を設け，ハンガー主杆 1 とハンガー主杆 2 を回動させてハンガー主杆 1 の下にハンガー主杆 2 が重合した状態に止着自在とすると共に，ハンガー主杆 2 を十文字に開いた状態に止着自在とし，掛吊杆 4 のより以上の落下を防止するストッパーと弾機 3 を設けた被服ハンガー。」

(イ) 引用例 1 の記載

さらに，引用例 1（甲 1）には，次の各記載及び図示がある。

a 「本考案は一对のハンガー主杆 1，2 を重合状としてその中心を弾機 3 で弾支した掛吊杆 4 により回動自在に枢支させ，各ハンガー主杆 1，2 の両端に掛止孔 5，6 を列設すると共に両主杆 1，2 のいずれかに取付けた支片 7 に挿通孔 8 を介しかつ弾機 9 で弾支し摺動自在とした掛止杆 10 を設け掛止杆 10 の掛止曲鉤 11 を両主杆 1，2 の挿支孔 12，13 に掛脱自在に掛合させて成る吊干器兼用の被服ハンガーに係る。

第 1 図



本考案は上述の構成であるから，第 1 図示のように両主杆 1，2 を上下重合して掛止杆 10 を掛止させ一体化して用いれば，通常の被服ハンガーのようにこれに被服を常法のごとく掛架できる。」（1 頁左欄 6 ～ 18 行）

b 「また掛止杆 10 を弾機 9 に抗して図の場合これを引上げ，その掛止曲鉤 11 を両主杆 1，2 の掛止孔 12，13 から外し，主杆 1，2 を…十文字に開く時は，ズボンスカート等の洗濯物を各主杆 1，2 の掛止孔 5，6 を利用して掛吊した吊挟み金具等によつて掛吊支持することにより，ズボン，スカートを開放状に吊持して，通風の良好によつて形を損ぜずに速かに乾燥できるのである。

本考案による構造上の利点は，従来のハンガーのごとく単に被服の支持用のみでなく，吊干器としても兼用できる点であり，一对のハンガー主杆 1，2 は…簡単に

重合され、中心の掛吊杆 4 によつて回動自在に組合せられるのである。このさい杆 4 に弾機 3 を附設してあるから、両主杆 1, 2 を常に確実に接支させ重合のさいも十文字のさいも揺動ガタを生じることもない。」（ 1 頁左欄 2 2 行～右欄 1 0 行）

ウ 引用発明 2 について

（ア） 引用発明 2 の構成

他方、引用発明 2 の構成が次のとおりであることも、当事者間に争いがない。

「ハンガー本体の中央部には、かけはずし継手(3<sub>1</sub>)に固定されたフック(1)が一定距離上下動し且回転自在に挿通する挿通穴を設けると共に挿通穴の下端部に歯体を設け、ハンガー本体とかけはずし継手(3<sub>1</sub>)とを回動させて歯体にかかけはずし継手(3<sub>1</sub>)を係合させて止着自在とし、フック(1)のより以上の落下を防止するストッパーと挿通穴の間に弾性体(4)を設けて、弾性体(4)に抗してフック(1)を押し引き下げ自在としたハンガー。」

（イ） 引用例 2 の記載

さらに、引用例 2（甲 2）には、次の各記載及び図示がある（各記載の引用箇所を特定する頁数は、明細書に付されたものである。）。

a 「〔産業上の利用分野〕

この考案は、フックに対するハンガー主体の旋回と旋回止めができるようにした衣類用ハンガーに関する。」（ 1 頁 1 2 ～ 1 5 行）

b 「〔従来の技術〕

従来の衣類用ハンガーにおいては、フックに対してハンガー主体が旋回できないものと自由に旋回できるが旋回止めができないものとがあった。」（ 1 頁 1 6 行～末行）

c 「〔考案が解決しようとする問題点〕

しかし、これでは場合に応じてフックに対してハンガー主体を適当角度に旋回させ、かつ旋回止めして用いるのに不向きであつた。

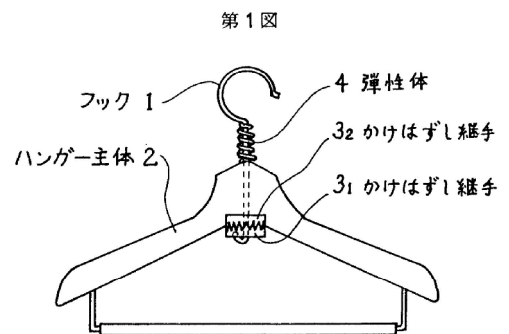
この考案は、このような欠点を解決し、フックに対してハンガー主体が旋回でき、

かつ旋回止めができる衣類用ハンガーを提供することを目的としている。」( 2 頁 1 ~ 8 行 )

d 「〔問題点を解決するための手段〕

この考案の第 1 実施例を示す第 1 図にもとづいて説明すれば、次の通りである。

(1)はフック、(2)はハンガー主体であり、この両者(1)、(2)のみの関係では、フック(1)に対してハンガー主体が旋回自在になっている。(3<sub>1</sub>)、(3<sub>2</sub>)はかけはずし継手であり、それぞれフック(1)の下部とハンガー主体(2)中央下部とに固設されている。(4)はコイルスプリングによる弾性体であり、フック(1)の湾曲部下端とハンガー主体(2)上部とを押し広げるように作用させることによって両かけはずし継手(3<sub>1</sub>)、(3<sub>2</sub>)を加圧掛合させている。」( 2 頁 9 行 ~ 末行 )



e 「〔作用〕

この考案は、以上のように構成されているので、弾性体(4)を押し返すように操作すれば、フック(1)に対しハンガー主体(2)を旋回させることができ、その操作をやめれば両かけはずし継手(3<sub>1</sub>)、(3<sub>2</sub>)は加圧掛合されて、フック(1)に対するハンガー主体(2)の旋回止めがなされる。」( 3 頁 1 ~ 7 行 )

f 「〔考案の効果〕

この考案は以上説明したように、フック(1)に対するハンガー主体(2)の旋回と旋回止めができるので、物干用として用いるならば、洗濯物の量や日差しに応じて物干竿に対して適当角度に旋回止めして用いることができる。また衣裳ダンス内で用いれば、衣服のかけはずし時などにハンガー主体(2)の正面を使用者側に向けることができる。また、鴨居にフック(1)を掛ける時には、ハンガー主体(2)を適当角度に旋回止めして用いると安定性が得られる。また、衣服の展示用として効果的な旋回角度を設定するのに都合がよい。」( 4 頁 1 8 行 ~ 5 頁 9 行 )

## エ 検討

上記イ及びウによれば，引用発明 1 は吊干器兼用の被服ハンガーに係る技術分野に，引用発明 2 は物干し用にも用いることのできる衣類用ハンガーに係る技術分野にそれぞれ属するものであり，両発明は，その属する技術分野を共通にするものといえる。

また，引用発明 1 は，通常の被服ハンガーとして用いるとともに，吊干器として用いるため，互いに回転自在としたハンガー主杆 1 とその下部に設けられたハンガー主杆 2 とを，弾機 3 及び掛止杆 10 により，重合状態及び十字型状態の双方において確実に接支させるものであり，互いに回転自在としたハンガー主杆 1 及び 2 を一定の角度を有する状態で確実に固定させるとの技術的課題を解決するものと認められる。

他方，引用発明 2 は，物干し竿等に掛ける場合に所望の角度を持たせた旋回止めが可能なハンガーとするため，互いに旋回自在としたハンガー主体(2)の中央下部に設けられたかけはずし継手(3<sub>2</sub>)とフック(1)の下端付近（かけはずし継手(3<sub>2</sub>)の下部）に設けられたかけはずし継手(3<sub>1</sub>)とを，かけはずし継手(3<sub>1</sub>)及び(3<sub>2</sub>)に形成された歯体並びに弾性体(4)により，フック(1)とハンガー主体(2)とが一定の角度を有する状態で，かけはずし継手(3<sub>1</sub>)及び(3<sub>2</sub>)を加圧掛合させるものであり，互いに旋回自在としたフック(1)とハンガー主体(2)を一定の角度を有する状態で確実に固定させるとの技術的課題を解決するものと認められる。

そうすると，両発明は，実質的に同様の技術的課題を解決するものといえることができる。

なお，引用発明 2 の構成を引用発明 1 に適用することにつき，何らかの阻害要因があるとはうかがわれない。

以上によると，当業者は，容易に，引用発明 1 における上記固定方法に代え，引用発明 2 の構成を適用することができるものというべきである。

オ この点に関し，原告は，引用発明 1 及び 2 がその用途を異にするとして，引

用発明２の構成を引用発明１に適用することに容易に想到し得ないと主張するが、引用発明１も、引用発明２も、いずれもハンガーに関する発明であることに照らすと、その用途に違いがあったとしても、当業者にとってみれば、その違いは以上の判断を妨げるようなものではなく、原告の主張を採用することはできない。

(2) 本願発明の構成に容易に想到し得るか否か

ア 引用発明２の構成は、前記(1)ウ(ア)のとおりであるところ、これを引用発明１に適用すれば、本願発明の 吊り杆を「補助ハンガーに固定」するとの構成、（ハンガー本体の中心部の挿通穴の下端部に設けられた）「凹部に補助ハンガーを係合させて」十字型状態に止着自在とするとの構成及び ストッパーと挿通穴の間にバネを設けて、バネに抗して吊り杆を押し引き下げ自在とするとの構成）を得ることができることは明らかであるから、当業者は、引用発明２の構成を引用発明１に適用することにより、本願発明の構成に容易に想到し得たものというのが相当である。

イ この点に関し、原告は、本願発明と引用発明２がその解決課題及び技術的思想を異にするとして、仮に引用発明２の構成を引用発明１に適用し得るとしても、これによって本願発明の構成に容易に想到し得るとはいえないと主張するが、前記(1)及び上記アのとおり、引用発明２の構成を引用発明１に適用することができる以上、本願発明の構成を得ることができるといわなければならないから、原告の主張を採用することはできない。

(3) 掛合凹部の構成の設計的事項性

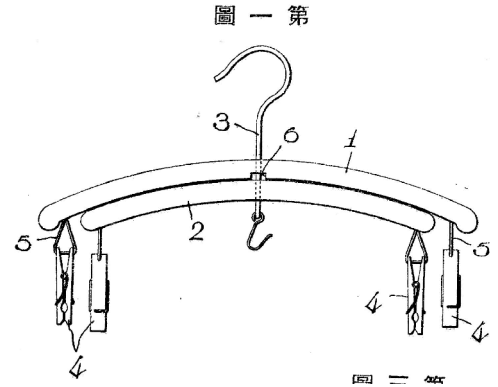
ア まず、引用発明１のハンガー主杆１の中心下部に設けられた「下向きの凹部」を「下向きの掛合凹部」とすることについて検討すると、以下のとおりにいうことができる。

(ア) 周知例１の記載

周知例１（甲３）には、次の各記載及び図示がある（参照の便宜のため、適宜、

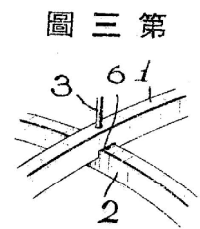
仮名遣い及び字体を改め，句読点を付した部分がある。 )。

a 「実用新案の性質，作用及び効果の要領 本考案は，長短二条の掛杆を上下に重ね合せて中央部を吊鉤に枢着し...たる構造のものにして，図中(1)(2)は上下に相合致すべき長短二条の掛杆，(3)は両掛杆の中央部に貫通したる枢軸兼用の吊鉤，...(6)は上位掛杆の中央部下面に形成したる係合凹所にして下部掛杆を直角の位置迄回動して該凹所に嵌合すべからしむ。



上下掛杆(1)(2)は，掛鉤(3)（判決注：『吊鉤(3)』の誤記であると認められる。）に対して緩く貫通せらるるが故に，下部掛杆(2)を直角の位置迄回動して之を凹所(6)に嵌合せしむれば，...両杆を十字形に組合せ得べく，此の場合，挟持具(4)(4)は，四個所に配列せらるるを以て，例えば『ズボン』を洗濯して乾かす場合には，其の上縁を各挟持具に支持せしむることにより『ズボン。』全体を筒状に吊り下げ得る為，著しく乾燥を迅速ならしめ得べく...」（１頁３～９行）

b 「登録請求の範囲 図面及び説明に示す如く，上下に合致すべき長短二条の掛杆(1)(2)を各中央部に於て枢軸兼用の吊鉤(3)に貫通吊持せしめ，...上部掛杆の下面中央に係合凹所(6)を穿ちて之に下位掛杆を嵌合すべからしめたる干物掛兼用衣紋掛の構造」（２頁１～３行）



(イ) 周知例２の記載

周知例２（甲４）には，次の各記載がある（各記載の引用箇所を特定する頁数は，明細書に付されたものである。 ）。

a 「実用新案登録請求の範囲

中央部に巾方向に向く貫通孔(1)を形成せる２ケの帯状板片(2a)(2b)をその貫通孔にフック(3)の直杆部(4)を挿通し抜止めとし，上段板片(2a)の中央部にはその下

半部に、又下段板片(2b)の中央部にはその上半部に板片の肉厚より大なる巾の切込み溝(5a)(5b)を形成し...たことを特徴とする物干具。」(1頁3~11行)

b「この物干具は上下両板片(2a)(2b)の対向する切込み溝(5a)(5b)を、一方の板片を90°向きを変えることによって...十字形に交叉固定状とすることができ、...又...上下の板片を揃えることによって1枚板のようになる」(3頁3~11行)

(ウ) 上記(ア)及び(イ)によれば、上下2本のハンガー主杆を嵌合し、十字型状態で固定するため、上部のハンガー主杆の中央下部に下向きの掛合凹部を設けることは、本件出願当時の周知技術であったものと認められるから、当該周知技術を適用して、引用発明1の下向きの凹部を下向きの掛合凹部とすることは、当業者が容易に想到し得たものと認めるのが相当である。

イ 次に、引用発明1の下向きの掛合凹部を掛合凹部に係る本願発明の構成とすることについて検討すると、以下のとおりいうことができる。

前記(1)ウのとおり、引用発明2のハンガー主体(2)の中央下部に固設されたかけはずし継手(3<sub>2</sub>)には、下向きに多数の歯体(3<sub>2</sub>)が形成され、これらの歯体(3<sub>2</sub>)が、かけはずし継手(3<sub>1</sub>) (かけはずし継手(3<sub>2</sub>)の下部に設けられたもの)に形成された多数の歯体(3<sub>1</sub>)と掛合されるのであるから、引用発明2のかけはずし継手(3<sub>2</sub>)は、下向きの掛合凹部であると認められる。

そして、引用発明2において、フック(1)に対してどのような角度でハンガー主体(2)を固定(旋回止め)するかは、かけはずし継手(3<sub>1</sub>)及び(3<sub>2</sub>)の歯体の形成方法(歯体の数、形、形成位置等)を変更することにより、当業者が適宜選択し得る事項であるといえるから、ハンガー主杆1及び2を十字型状態で固定することを目的とする引用発明1に引用発明2の構成を適用するに際し、引用発明2の下向きの掛合凹部を掛合凹部に係る本願発明の構成(ハンガー本体の腕部と十字方向のもの)とすることは、当業者が適宜選択することのできる設計的事項であると認めるのが相当である。

ウ 上記ア及びイによれば、当業者は、引用発明2の構成及び周知技術を引用発



明 1 に適用することにより，掛合凹部に係る本願発明の構成に容易に想到し得たものと認めることができる。

エ この点に関し，原告は，本件審決が認定した周知技術や引用発明 1 を基にして掛合凹部を設ける場合には，揺動ガタを防止するため，引用例 1 の第 4 図に示されたような別加工の大掛かりな支片を設ける必要があるとして，当該周知技術や引用発明 1 から，掛合凹部に係る本願発明の構成に容易に想到することはできないと主張する。

しかしながら，引用発明 2 の構成を引用発明 1 に適用すれば，揺動ガタを防止するための支片 7，掛止杆 10 等を設ける必要がなくなることは明らかであるから，原告の主張は，その前提を誤るものであって，失当といわなければならない。

また，原告は，周知例 1 及び 2 に記載された各技術が本願発明に比して不安定であると主張するが，前記ア(ウ)のとおり，周知例 1 及び 2 により認定した周知技術は，上部のハンガー主杆の中央下部に下向きの掛合凹部を設けるとの技術であるから，原告の指摘する事情は，上記ウの判断を左右するものではない。

#### (4) 小括

以上のとおりであるから，取消事由 1 は理由がない。

### 2 取消事由 2（顕著な作用効果についての判断の誤り）について

#### (1) 速乾性

##### ア 乙 1 公報の記載

乙 1 公報には，次の各記載がある（各記載の引用箇所を特定する頁数は，明細書に付されたものである。）。

(ア)「本考案は，洋服，シャツ類，下着類等の被服を吊下げるのに使用するハンガーに関するものである。」（ 1 頁 15 ～ 17 行）

(イ)「...従来のハンガーによると，...吊下げた被服の前の部分と背の部分の布地がくっつき易く，該被服の内部に空間があまりできないので，空気の流通が悪く乾燥時間が長くなる難点がある。」（ 2 頁 10 ～ 14 行）

(ウ)「...本考案のハンガーによると，...一対の吊下げ部 1 A 1 B が X 状に交差し  
たり...して自在に使用することができる。従って，洗濯後の乾燥用に用いるときは，  
...交差状態にして被服 7 を吊下げると，吊下げられた被服 7 は膨らんで肩の部分と  
袖の付け根部分には相当の空間部分が生ずることとなり，空気の流通性が極めて良  
くなる。そして，以上の肩の部分の膨らみは，被服 7 の下方にも影響するので，被  
服 7 の内部は全体的に空気の流通度を増し，被服 7 全体の乾燥を著しく促進する速  
乾作用がある。」( 4 頁 1 0 行～ 5 頁 1 行)

(エ) 従来構造のハンガーと乙 1 公報に係る考案のハンガーを用いて同一条件に  
おける速乾性を対比実験した結果(乾燥に要した時間)は，風があるときの天日乾  
燥の場合につき後者が前者の約 3 分の 2，雨天のときの室内乾燥の場合につき後  
者が前者の約 2 分の 1 であった。( 5 頁 2 ～ 4 行及び同頁の表)

(オ)「なお，本考案のハンガーは，前記の実施例に限定されず，基部 3 の連結軸  
をフック部 3 と分離したり，交差角 の任意調整ピンを付設する等公知手段によっ  
て変更を加えることがある。」( 5 頁下から 2 行～ 6 頁 2 行)

イ 上記乙 1 公報の記載に加え，被服をハンガー本体の上からかぶせる方法では  
ないものの(なお，被服をハンガー本体の上からかぶせるか否かによる作用効果の  
有無は，後記(2)の効率性に関するものである。)，前記 1 (1)イのとおり，引用発  
明 1 において，ハンガー主杆 1 及び 2 を十字型状態とし，被服を開放状に吊持す  
る方法をとることにより，通風を良好にして被服を速やかに乾燥することができるこ  
と，前記 1 (3)ア(ア)のとおり，周知例 1 に記載された干物掛兼用衣紋掛において，  
掛杆(1)及び(2)を十字型状態とし，被服を筒状につり下げ的方法をとることにより，  
乾燥を著しく迅速にすることができることをも併せ考慮すると，速乾性に関する本  
願発明の作用効果は，引用発明 1 及び周知技術から当業者が予測することのできる  
範囲内のものであると認められ，何ら顕著なものではないというべきである。

## (2) 効率性及び安全性

また，前記 1 (3)エのとおり，引用発明 2 の構成を引用発明 1 に適用すれば，揺

動ガタを防止するための支片 7，掛止杆 10 等を設ける必要がなくなることは明らかであり，また，これにより，一本状態のハンガーを十字型状態とし，十字型状態のハンガーを一本状態とするために，洗濯物の下から手を差し入れて作業をする必要がなくなることも明らかであるから，効率性及び安全性に関する本願発明の作用効果は，引用発明 1 及び 2 から当業者が予測することのできる範囲内のものであって，何ら顕著なものではないというべきである。

(3) 小括

以上のとおりであるから，取消事由 2 も理由がない。

3 結論

以上の次第であるから，原告主張の取消事由はいずれも理由がなく，原告の請求は棄却されるべきものである。

知的財産高等裁判所第 4 部

裁判長裁判官	滝	澤	孝	臣
--------	---	---	---	---

裁判官	本	多	知	成
-----	---	---	---	---

裁判官	浅	井	憲
-----	---	---	---